

支援につなげるためのアセスメント ～5領域の視点から～

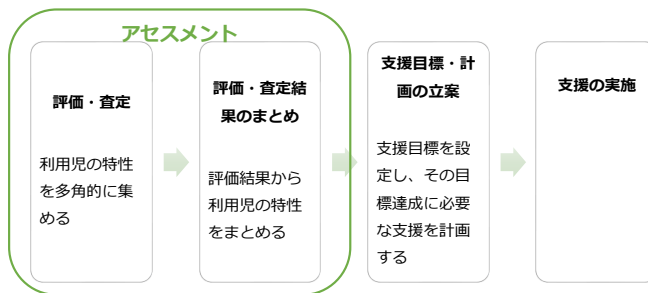
障害児通所支援事業所巡回支援アドバイザー
作業療法士 篠川裕子

本日の内容

1. 利用児の特性を把握する（評価・査定）
2. 利用児の特性を理解する（アセスメント）
3. アセスメントを支援につなげる

はじめに

- 個別支援計画は「支援の根拠となるもの」
- 支援の根拠には、利用児の特性を把握する必要がある
⇒アセスメント



放課後等デイサービスの方法(ガイドラインより)

それぞれの時期のこどもの発達過程や特性等に応じた発達上のニーズ、適応行動の状況や特に配慮が必要な事項等を丁寧に把握し理解した上で、放課後等デイサービスを利用する全てのこどもをありのままに受け止めて、こどもが自分らしく過ごせる場であるという安全・安心の土台の上で、総合的な支援を提供することを基本としつつ、こどもの発達段階や特性など、個々のニーズに応じて、特定の領域に重点を置いた支援を組み合わせて行うなど、包括かつ丁寧にオーダーメイドの支援を行っていくことが重要である。

- **こどもの発達過程や特性等に応じた発達上のニーズの把握**

こどもの発達過程や特性等に応じた、発達上のニーズの把握に当たっては、本人支援の5領域（「健康・生活」、「運動・感覚」、「認知・行動」、「言語・コミュニケーション」、「人間関係・社会性」）の視点等を踏まえたアセスメントを行う必要がある。

- **総合的な支援**

総合的な支援とは、本人支援の5領域の視点等を踏まえたアセスメントを行った上で、生活や遊び等の中で、5領域の視点を網羅した個々のこどもに応じたオーダーメイドの支援が行われるものである。

- **特定の領域に重点を置いた支援**

また、特定の領域に重点を置いた支援とは、本人支援の5領域の視点等を踏まえたアセスメントを行った上で、5領域の視点を網羅した支援（総合的な支援）を行うことに加え、理学療法士等の有する専門性に基づきアセスメントを行い、5領域のうち、特定（又は複数）の領域に重点を置いた支援が計画的及び個別・集中的に行われるものであり、一対一による個別支援だけでなく、個々のニーズに応じた配慮がされた上で、小集団等で行われる支援も含まれるものである。

こどもは家庭や地域社会における生活を通じて、様々な体験等を積み重ねながら育っていくことが重要である。そのため、「本人支援」に加え、「家族支援」、「移行支援」、「地域支援・地域連携」もあわせて行われることが基本である。

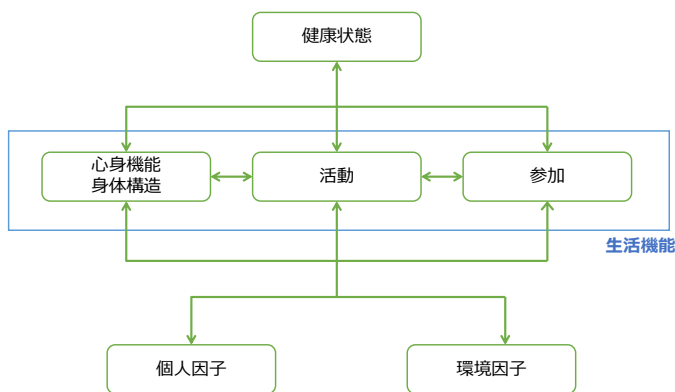
1. 利用児の特性を把握する（評価・査定）

何を評価・査定するのか

利用児の特性を把握するのに必要なこと

- **健康状態**
疾患、疾病、障害の状況
- **個人因子**
利用児の年齢、好きなこと、苦手なこと、価値観 など
- **環境因子**
保育所/幼稚園、学校の様子、家庭環境 など
- **利用児の生活機能**
機能や活動について、できること・していること（現状）・難しいこと（課題）を把握する
⇒ 5領域の視点を活用して把握する

国際生活機能分類（ICF）



ICFについて

目的・意義

生きることの全体像を把握するため

⇒ 個々の人の健康に関する状況、健康に影響する因子を深く理解するため

生活機能に影響する因子

- **健康状態**
疾病, 変調, 傷害
- **環境因子**
物的な環境、人的な環境（家族、友人、仕事上の仲間など）、態度や社会意識としての環境（社会が生活機能の低下のある人をどうみるか、どう扱うか、など）、制度的な環境（医療、保健、福祉、介護、教育などのサービス・制度・政策）
- **個人因子**
その人固有の特徴をいう。年齢、性別、民族、生活歴（職業歴、学歴、家族歴、等々）、価値観、ライフスタイル、コーピング・ストラテジー（困難に対処し解決する方法）等々

生活機能

●心身機能・身体構造（生物レベル、生命レベル）

生命の維持に直接関係する、身体・精神の機能や構造のこと。心身機能とは、たとえば手足の動き、精神の働き、視覚・聴覚、内臓の働きなど。身体構造とは、手足の一部、心臓の一部（弁など）などの、体の部分のこと。

●活動（個人レベル、生活レベル）

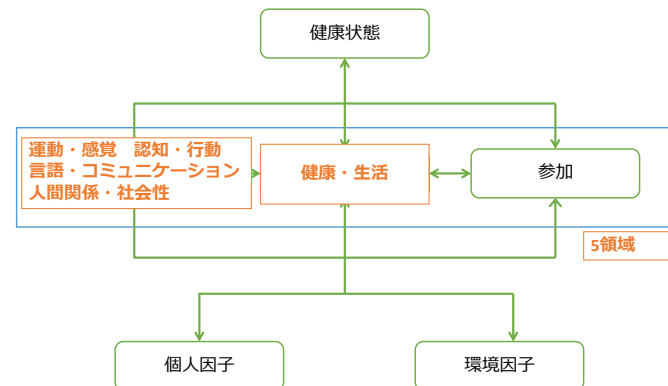
あらゆる生活行為を含むものであり、実用歩行やその他のADL（日常生活行為）だけでなく、調理・掃除などの家事行為・職業上の行為・余暇活動（趣味やスポーツなど）に必要な行為・趣味・社会生活上必要な行為のこと。

またICFでは「活動」を「できる活動」（「能力」）と「している活動」（「実行状況」）との2つの面に分けて捉える。

●参加（社会レベル、人生レベル）

家庭や社会に関与し、そこで役割を果たすことである。社会参加だけではなく、主婦として、あるいは親としての家庭内役割であるとか、働くこと、職場での役割、あるいは趣味にしても趣味の会に参加する、スポーツに参加する、地域組織のなかで役割を果たす、文化的・政治的・宗教的などの集まりに参加する、などの広い範囲のものが含まれる。

国際生活機能分類（ICF）と5領域



5領域について

①健康・生活

- ・健康状態
- ・生活習慣や生活リズム
- ・基本的な生活スキル
- ・生活におけるマネジメントスキル

具体的には

- ・ ADL：セルフケア（食事・排泄・更衣・入浴・整容）・起居/移動
- ・ IADL：屋内活動（家事、家の手伝い、金銭管理など）・屋外活動（買い物・交通機関の利用 など）
- ・ 生活リズム（例えば、食事、睡眠などのリズム）など

② 運動・感覚

- ・ 姿勢と運動・動作の機能
- ・ 移動運動の機能
- ・ 感覚機能とその特性
視覚、聴覚、触覚、固有受容覚、前庭覚

具体的には

- ・ 姿勢保持（例えば、座位姿勢や立位姿勢など）
- ・ 移動（例えば、歩行や代替手段における移動など）
- ・ 感覚機能（視覚・聴覚・触覚などの機能）
- ・ 感覚刺激に対する反応の特異性（例えば、感覚過敏、低反応など）
- ・ 上肢機能（道具の操作・両手動作の状況など）など

③ 認知・行動

• 認知機能

認知機能とは、感覚器を通じて得た情報を整理し、物の性質、特質を知り、判断し、感覚刺激の内容を理解する機能

(知的機能：記憶、知覚、注意、言語理解、推論・判断)

• 行動の特性

具体的には

- 視覚認知（例えば、空間の理解、形の理解 など）
- 言語理解
- 抽象的概念の理解（例えば、数、色、形など）
- 教科学習の基礎的な課題
- 行動のまとまり状況（多動・寡動性、注意集中性・衝動性 など）
- 行動の目的性や興味関心の状況、定型的な行動（常同行動・こだわり・儀式的行動 など）

など

④ 言語・コミュニケーション

- 言語の理解
- 言語の表出
- コミュニケーション機能
動作などの表現を含む
- 読み書きの機能

具体的には

- 非言語性（ジェスチャーや表情など）
- 要求の表現・方法
- 理解言語（言語指示の理解度など）
- 表出言語（発声、音声模倣、言葉の模倣、単語、文章の表出など）
- 会話のやりとり
- 文字の読み、書字機能
など

⑤ 人間関係・社会性

- 情緒
- 人間関係（他者との関わり）
- 社会性
- 自己の理解と行動調整
- 集団参加

具体的には

- 感情の安定性（感情の変動や、気持ちの立ち直りなど）
- 人への反応（対大人、こどもなど、相手の状態による違いなど）
- 遊びの中での対人関係
- 集団での行動特性
など

2. 利用児の特性を理解する（アセスメント）

どのように理解するのか

個別支援計画の「総合的な支援の方針」として

- ①利用児はどのような特性があり、
- ②その特性がニーズとどのような関連があるのか、
※保護者と本人の希望・要求（ニーズ）を具体的に把握することが不可欠
そして、
- ③どのように支援をする方針なのか

を記載できるように考える

- ②その特性がニーズとどのような関連があるのかを考える
※保護者と本人の希望・要求（ニーズ）を具体的に把握することが不可欠

・健康状態や個人因子、環境因子がどのようにニーズに影響するかを考える

→利用児の特性に影響しているかもしれない因子についてどのように支援をするかを考える（家族支援や移行支援などにつなげる）

・なぜ、そのようなニーズが生じるのかを考える

→ニーズの分析を行う

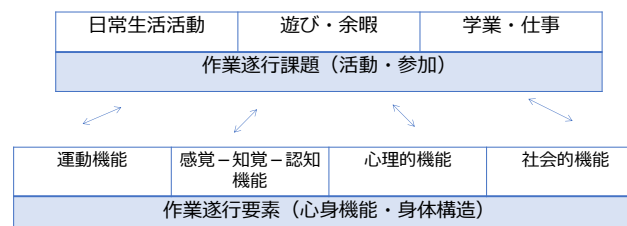
- ①利用児はどのような特性があるかをまとめる

していること（現状）と難しいこと（課題）の両方の視点でとらえる

例) 評価のまとめシート

	現状	課題
健康・生活		
感覚・運動		
認知・行動		
言語・コミュニケーション		
人間関係・社会性		

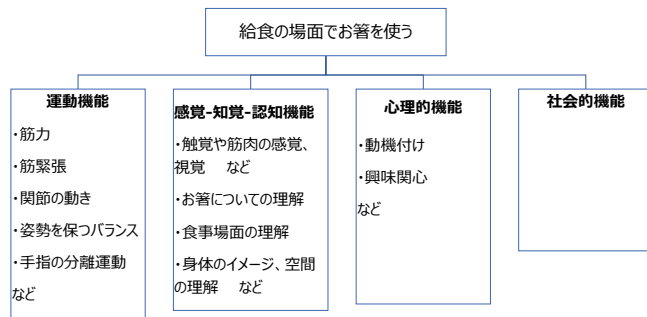
ニーズの分析 生活機能を作業の「遂行課題」と「遂行要素」から捉える



参考: 作業療法学全書(改訂第3版) 作業治療学3 発達障害 協同医学出版社

何かの作業は一つの要素で成り立っているのではなく、様々な要素が関連しているため、各機能の状況を把握する必要がある

ニーズの分析
例) 給食の場面で箸を使う活動



「学校でお箸が使えるように」のニーズには
利用児の年齢や疾患特性、学校の椅子や机、教室の環境などと様々な
機能が関連していると考えてみる

3. アセスメントを支援につなげる

どのように支援につなげるのか

- ① **支援の方針を明確にする**
ニーズに対してどう支援するかを言語化する
- ② **具体的な目標をたてる**
達成できたかどうかを確認できるように具体的に示す
- ③ **活用する活動はどのような要素で成り立っているかを多角的に把握する**
活動のねらい、利用児ごとの目標を明確する

ポイント

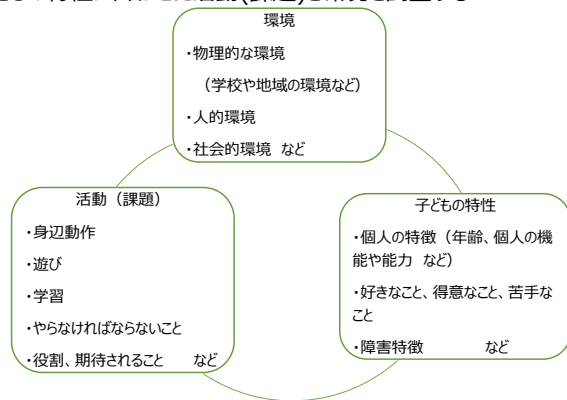
- ・ 発達的な視点をもつ
- ・ 安心して力が発揮できる場となるような環境調整
- ・ できないことを改善するだけでなく、健康な部分をさらに伸ばす、できることをふやす、伸ばす、グッドポイントを伸ばす

発達の視点 各ライフステージの発達課題と目標

	発達課題	獲得すべき目標
乳児期	<ul style="list-style-type: none"> ・ 空間の移動と物の操作 ・ 生理的安定 ・ 環境と物の理解 ・ 人と関わる基盤づくり (愛着形成) 	安全と安定感・たくましい心と体
幼児期	<ul style="list-style-type: none"> ・ 移動能力の完成 ・ 言葉とコミュニケーション ・ 自我の芽生えと対人機能の発達 ・ 集団活動の準備 ・ ADLの自立 	愛情と所属感 (相互信頼) 外界との交流
学童期	<ul style="list-style-type: none"> ・ 運動技能の向上、行動範囲の拡大 ・ 論理的な思考、抽象的理解の獲得 ・ 仲間意識の深まり ・ 自尊心、自己肯定感 	自尊心・自己理解 他者から認められること
青年期	<ul style="list-style-type: none"> ・ アイデンティティの確立 ・ 身体の成熟と性への芽生え ・ 友人、異性関係の深まり ・ 進路、職業選択 	自己実現 自己有能感

力が発揮できる環境調整

子どもの特性に合わせた活動(課題)と環境を調整する



最後に

支援者自身も自分の特性を理解することが大切

・自分がどのように対象児・者を捉えているかに気づく

支援者が違えば、対象児・者の行動の捉え方が変わる、関わり方が変わることを理解し、共有する

・自分が対象児・者にどんな影響を与えているに気づく

例えば、自分の声かけ・視線・動作にどのような特性があるかを把握し、それらがどのように対象児・者に影響を与えるかを把握する